流れゆく雲に

■楽曲データ

歌詞：芦田茂　作詞

楽曲：深貝美子　作曲（仏教音楽研究所　補作）

発表：仏教音楽研究所　1979年

初演：―

初出：『流れゆく雲に』　浄土真宗本願寺派仏教音楽研究所　1979年

管理番号：M1485

■創作の経緯

仏教音楽研究所の第４回作曲募集（1979年度）入選作品のひとつ。《花のこころ》とともに発表。

■校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第２巻収録

底資料：『浄土の音楽集成　仏教讃歌６　明日への讃歌』楽譜　同朋舎出版　1994年

比較資料：自筆譜

校訂の詳細：特記事項なし

■解説

◆曲について

明るく、爽やかな仏教讃歌です。歌詞には仏教用語ではなく、一般的な言葉が用いられています。１番は、一見自然を賛美するような内容ですが、２番へ読み進めると、ここで描かれているのはやはり、阿弥陀さまのみひかりのなかで、手を合わせてお念仏する私達の姿だと、気づきます。

旋律は流れるような音型と、躍動感のあるリズムでまとめられています。少し音域が低いかもしれませんが、はつらつと歌ってください。

◆作詞者・作曲者について

作詞の芦田茂さんは、大阪府在住。会社経営の傍ら、長年作詞活動を続けています。

作曲の深貝美子さんは、宗門校の岐阜聖徳学園大学教育学部（作品発表当時は聖徳学園岐阜教育大学）で声楽の教鞭をとりながら、童謡やオペレッタなどの声楽作品を創作しています。

◆演奏のヒント

①この曲は、小節の１拍目が８分休符で、裏拍から入るフレーズがたくさんあります。テンポをよく感じて、各フレーズをタイミングよく歌っていくのが、この曲のポイントのひとつです。

②全体的に、なだらかに音が続いていくので、油断するとリズム感の乏しい歌い方になってしまいます。ポイントになる言葉（例えば、１小節目４拍目の「雲」「花」など）を軽く言い直し、めりはりをつけて歌いましょう。

③９小節目からは、音域が高くなります。低い音域から急に高い音域に移るときは、ずり上がるような歌い方になりがちです。あらかじめ、高い音を予測してからだの準備を整えて歌いはじめましょう。また、10小節目の「シ」、11小節目の「ド」は、伸ばしているうちに音が下がりやすいので、正しい音を保つようにしましょう。

④17小節目からはこの歌のクライマックスです。９小節目以降と同じく、音域が急に上がるので、注意しましょう。特に、18・19小節の４拍目に出てくる「手」は文脈上大切な言葉ですから、メロディーでも高い音がつけられています。ぶつけたような歌い方にならないように、テヌートぎみに（音の長さを十分に保って）歌うとよいでしょう。

◆楽譜

原曲は斉唱です。二部合唱版は、楽譜集『讃歌集　二部合唱』第８巻に掲載されています。

解説執筆：山口篤子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所［現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室］研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 76（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第 203 号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.